

環境化学物質による生殖発達の攪乱影響

薬学部 衛生化学研究室 坂 晋

現在、多くの女性の初潮は 13 歳までに生じ、1 世紀前の 16-17 歳と比べて非常に早期化している。初潮の早期化や月経異常の増加など、女性生殖発達の攪乱は、多くの成人疾病（乳がん、子宮がん、メタボリックシンドローム、2 型糖尿病等）のリスク要因である。そのため、女性生殖発達の攪乱の原因を解明することは、女性における成人疾病の予防上重要である。

女性生殖発達の攪乱には、主に胎児期・幼若期における社会経済因子、栄養因子の他、環境化学物質への曝露などが交互的に影響するが、その詳細は不明である。このような背景の下、本研究室では、胎児期・幼若期曝露に焦点をあてて、環境化学物質による女性生殖発達の攪乱影響について調べてきた。

近年、疫学研究において、防虫剤や消臭剤等に使用されてきた芳香族塩素化合物のパラジクロロベンゼン (*p*DCB) の主要代謝物である 2,5-ジクロロフェノール (2,5-DCP) の尿中濃度と初潮の早期化や卵胞成熟に関与する FSH 量などとの関連が相次いで報告されるなど、*p*DCB による雌性生殖発達への攪乱影響が懸念されている。そこで、本セミナーでは、私のこれまでの研究を紹介しながら、現在取り組んでいる *p*DCB による雌性生殖発達への攪乱影響について報告する予定である。